

松戸市五香六実元山所在馬土手

(松戸市計画道路事業3-4-17稔台六実線)
(道路事業に伴う埋蔵文化財調査報告書)

1983

千葉県東葛飾土木事務所

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

松戸市は、縄文時代の遺跡を始めとして数多くの遺跡が分布しており、その中の1つとして江戸時代に、徳川幕府が軍馬の育成に力を入れた小金牧があり、現在でもその名残りの馬土手が一部に残っています。

今回、松戸市計画道路事業3-4-17稔台六実線道路事業に伴い、昭和58年2月に馬土手の一部を、当(財)千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになりました。

その結果、高さ約3m、基底部推定約6mの比較的大規模な馬土手であることが判明しました。なお、開発行為その他でもかろうじて残存してきた馬土手の調査は、東葛飾地方で学術調査のメスが入られた希少な例であり、その構造、規模が明らかにされたことは、今後の柏、流山などの発掘資料とともに、馬土手を理解する上での指針ともなり得るものであります。

この報告書が、学術資料としてはもとより、教育資料および郷土の歴史に対する理解を深める資料として、広く活用されることを望んで止みません。

最後に千葉県東葛飾土木事務所、千葉県教育庁文化課、松戸市教育委員会社会教育課の御協力、御指導と、極寒の中で調査に従事された調査補助員の方々に対して、心から謝意を表します。

昭和58年3月31日

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 今井 正

凡 例

1. 本報告書は、千葉県東葛飾土木事務所による、松戸市計画道路事業3-4-17稜台六実線道路事業に伴う、元山所在馬土手の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から、報告書作成に至る業務は、千葉県東葛飾土木事務所の委託を受け、千葉県教育庁文化課の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 発掘調査、整理作業は調査部長白石竹雄、班長清藤一順の助言のもとに鈴木定明が行った。
4. 報告書の作成作業、及び原稿執筆は鈴木定明が行い、清藤一順が編集した。
5. 本報告書の作成にあたり、馬土手関係資料に関して、松戸市教育委員会社会教育課染谷孝雄氏、古里節夫氏、英文抄訳に関して、東京大学総合資料館山浦清氏の御指導、御協力を得ている。
6. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県東葛飾土木事務所、千葉県教育庁文化課、松戸市教育委員会から御指導、御協力を得ている。
7. 第1図は、国土地理院著作発行、2万5千分の1「松戸」、第2図は、松戸市都市部作成の都市計画図21（2千5百分の1）を再トレースし5千分の1に縮尺した。第7図は、国土地理院著作発行、5万分の1「東京東北部」を使用している。また、付図は陸地測量部著作発行の迅速図、2万分の1の「小金町」「八幡町」「白井橋本村」「習志野」を合成し使用している。
8. 遺物及び実測図等の資料については、財団法人千葉県文化財センターで保管している。

目 次

序 文	
凡 例	
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡周辺の環境	1
III 遺構と遺物	4
1. 遺 構	4
2. 遺 物	8
IV 小 結	8
英文抄訳	13

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺地形図	2
第2図 元山所在馬土手及び周辺の残存馬土手他分布図	3
第3図 元山所在馬土手平面図	5
第4図 元山所在馬土手土層断面図	7
第5図 出土遺物	9
第6図 小金牧各内牧の分布図	10
第7図 松戸市内に残る馬土手分布図	11

付 図 目 次

付図 明治10年代の中野牧を中心とする馬土手分布図 (1/25,000)

図 版 目 次

図版1 遺跡周辺の航空写真	
図版2 1. 調査前全景 2. No1トレンチ土層断面	
図版3 1. No2トレンチ土層断面 2. No3トレンチ土層断面	
3. 遺跡北東に残る馬土手遠景 (第2図-①)	
図版4 1. 図版3-3の近景 2. 遺跡東側善光寺境内に残る馬土手近景 (第2図-②)	
3. 同上 (第2図-③)	

I 調査に至る経緯

昭和57年3月、千葉県都市部道路計画課は、在来の県道稔台六実線の拡幅工事（松戸市計画道路事業3-4-17稔台六実線道路事業）にあたって、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を松戸市教育委員会経由千葉県教育委員会へ提出した。4月、県教育庁文化課は、その照会にもとづき、現地調査を実施し、近世の馬土手の所在を確認した。その結果、工事区域内に所在する埋蔵文化財について記録保存の措置がとられることになり、県教育委員会から記録保存のための発掘調査を実施する機関として、財団法人千葉県文化財センターが指定をうけた。これにより、昭和58年2月、上記道路事業の実施機関である千葉県東葛飾土木事務所と当千葉県文化財センターとの間で発掘調査の委託契約がとり交され、昭和58年2月1日～2月18日まで発掘調査が実施される運びとなった。

II 環 境

元山所在馬土手は、千葉県松戸市五香六実字元山10-1、10-10、10-27にまたがって所在する。松戸市は千葉県の西北部に位置し、北側は流山市、柏市と接し、東側は沼南町、鎌ヶ谷市に接し、南側は市川市に接している。また西側では江戸川が北から南に流れており、川を境に埼玉県三郷市と東京都葛飾区にそれぞれ接している。本市は「下総台地」の西部に位置し標高25m前後の台地が大部分を占め、わずかに江戸川沿いの西側に標高4m前後の沖積地がみられる。

本遺跡は市内中心部から南西寄りの、標高28m前後の台地上に所在する。この付近は市内でも最も標高の高い微高地を形成している地域で、市内西側の谷は江戸川水系へ続き、東側の谷は手賀沼から利根川水系へと続く分水嶺となっている。

本遺跡の東側周辺には、縄文時代中期、後期の土器を出土する包含地（五香六実元山Ⅰ遺跡、同Ⅱ遺跡）と縄文時代早期、前期、中期、後期の土器と貝類を出土する地点貝塚（鳥井戸遺跡）がある。さらに東側を目を転じてみると縄文時代を中心として弥生時代、古墳時代、歴史時代の遺跡が数多く所在している。中でも子と清水貝塚は地点馬蹄形貝塚として、住居跡、土壌群、墓址などが検出され、よく知られているところである。

また、本遺跡（江戸時代）に直接関連する遺跡としては、遺跡から南へ約500mの地点に「おひら立場」、東へ約2.5kmの地点に「金ヶ作陣屋跡」がそれぞれ所在している。また本遺跡東側の善光寺境内には馬土手が2条（第2図-②・③）、わずかに残っており、そのうち③は本遺跡の



第1図 遺跡周辺地形図



第2図 元山所在馬土手及び周辺の残存馬土手他分布図 (1/5,000)

馬土手と連続すると思われる。善光寺際の交差点を挟んだ北側には、ほぼ南北方向に長さ約200mの馬土手（第2図-①）が残っている。

III 遺構と遺物

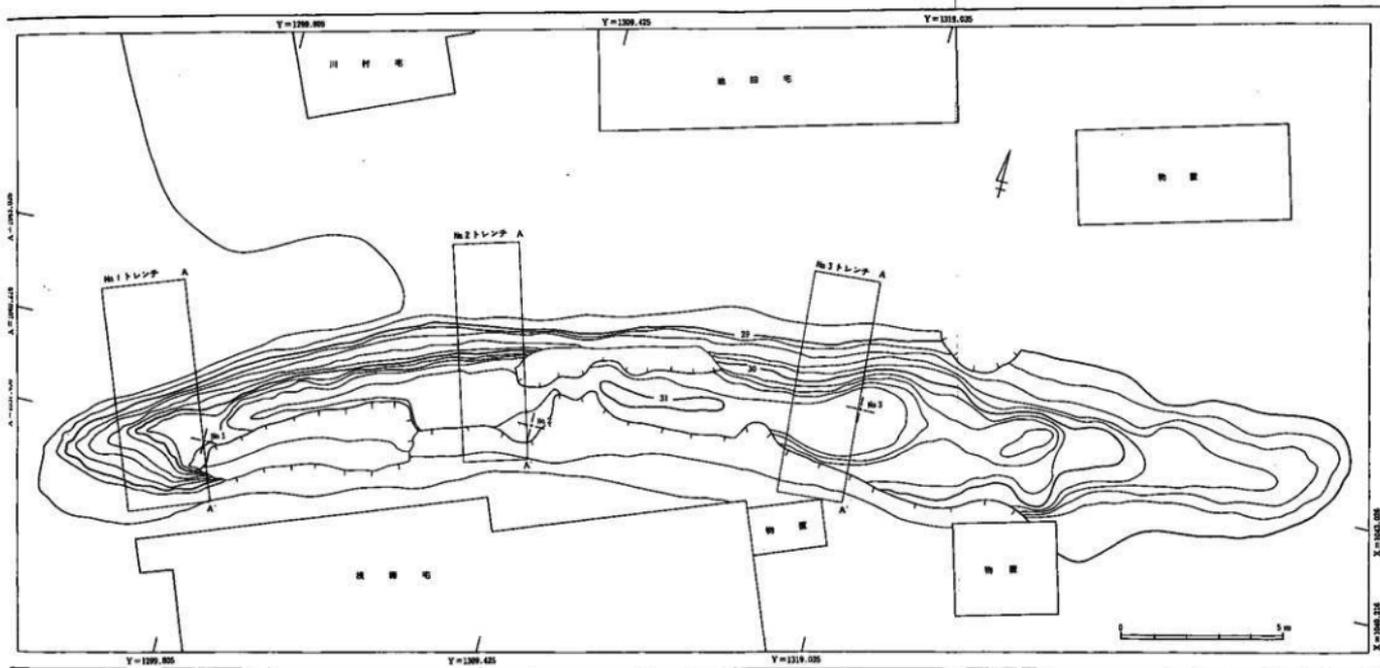
1. 遺 構

現況：馬土手は北側を川村宅、池田宅に、南側を浅海宅の敷地及び家屋に囲まれており、馬土手全体が土取りのために削平されたり、崩されている。とくに馬土手の南側は家屋を建築する際に裾部をかなり削平しており、その後の盛土の崩れもはげしく、逆に土手が入り込んでオーバーハングしている部分もかなり見られる。また、馬土手を境として南側と北側では現表土面に約60cmの比高差が見られる。本来は北側から南側にかけて緩傾斜で下がっていた地形が、北側に宅地造成する際に盛土を行ったためにこのような比高差ができたと思われる。現況での規模は、長さ約30m、高さ（北側の現表土面からの高さ）約2m、幅約4mで、平面形態はESE-WSW方向を主軸とし、わずかに北側に張り出した孤状を呈している。断面形態は半円状及び台形状を呈している。

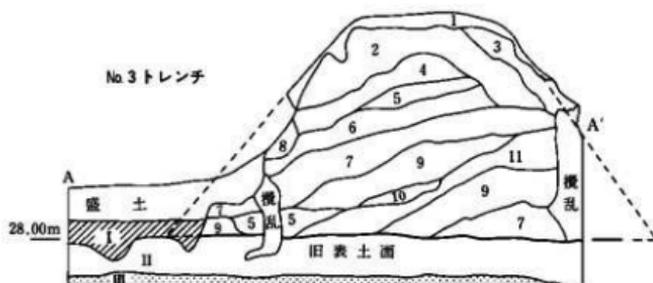
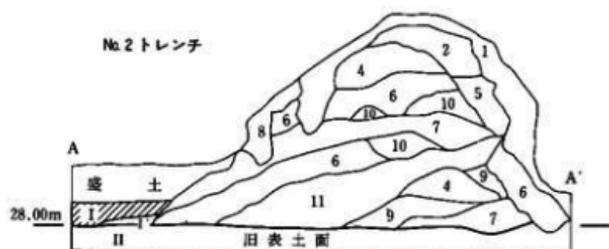
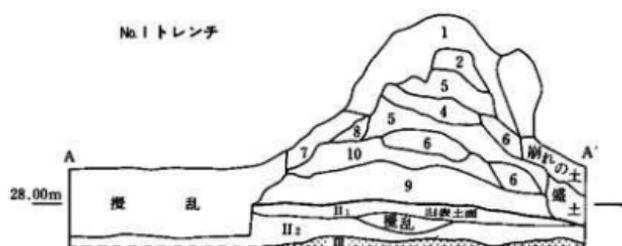
調査：馬土手の現況を20cmコンタで測量し、平面図を作成したのち、10m間隔で3本のトレンチ（西側からNo1、No2、No3トレンチとする）を設定し調査した。なお馬土手南側については馬土手以外は区域外にあたるためトレンチは馬土手裾部でとめざるを得なかった。

調査結果：No1～No3まで3本のトレンチを入れた結果、いずれも遺存状態は良くない。とくにNo1トレンチは両側とも削平と崩壊でほとんど原形をとどめていない。旧表土面からの現存高は約2.5mを測る。No2トレンチは南側裾部の削平と崩壊はかなり著しく、また北側の頂部付近から下方にかけては削平が一層著しい。土層断面を観察すると北側裾部に当時の原形がcaろうじてみられる。旧表土面からの現存高は約2.8mを測り、ほぼ原形の高さに近い。No3トレンチは両側の裾部が削平されているものの、頂部を中心とした上半部については当時の原形をよく残している。頂部には約2mの平坦部がみられ、旧表土面からの現存高は約3mを測る。

次に盛土の方法は、基本的には南側から北側に向けて土を積んでいることがNo2及びNo3トレンチで顕著にみられ、全体的に土は固くしまっているが版築した痕跡はみられない。盛土全体を通じて言えることは、積んでいる土が黒褐色土層を中心としており、caろうじてソフトローム、ハードロームが盛土の中間部と頂部付近南側に積まれているだけである。これは馬土手構築の際に、周辺の自然堆積層（II層：遺跡周辺では50～60cmと厚い）を広く採取して積んでおり、ロームを深くまで掘り込んでの土の採取はあまり行なわれなかったと思われる。



第3図 元山所在馬土手平面図 (1m)



- | | |
|----------------------------------|--|
| 1. 表土層(草木等の根でおおわれている部分) | 8. 茶褐色土層(固く密である) |
| 2. 茶褐色土層(全体にハードロームがブロック状に混入) | 9. 黒褐色土層(#) |
| 3. ハードロームブロック層(暗褐色土が若干混入) | 10. ソフトローム主体層(黒褐色土が若干混入) |
| 4. 黒褐色土層(ソフトロームがブロック状に混入・固く密である) | 11. 黒褐色土層(ソフトロームがブロック状に混入) |
| 5. # (暗褐色土がブロック状に混入・固く密である) | I層、表土層、I'層馬土手盛土の崩れの上 |
| 6. # (ソフトローム、暗褐色土がブロック状に混入) | II層 黒褐色土層、II ₁ 暗褐色土層、II ₂ 黒色土層 |
| 7. 暗褐色土層(固く密である) | III層、ソフトローム層(立川ローム層軟質部) |

第4図 馬土手トレンチ土層断面図(1/60)

馬土手に伴う溝については、各トレンチとも北側には検出されなかった。従って、溝が存在するとすれば南側の可能性が高いが、区域外にあたるため調査はできなかった。また、盛土の状況からみて、ロームが非常に少なく黒褐色土が多いことから、溝が存在したとしても馬土手の規模の割には浅いものであったと思われるし、あるいは溝はなかった可能性も考えられる。

以上が、調査結果であるが、最後に本馬土手の原形の復元規模（第4図 Na3 トレンチ参照）を述べておきたい。

規 模—基底部の幅	6.5m前後
頂部平坦部の幅	2 m前後
高さ	3 m前後

断面形態—台形状を呈する。

2. 遺 物

出土遺物は陶器片で、Na2 トレンチで13点、Na3 トレンチで7点が盛土内より出土した。

1はNa3 トレンチ出土。磁器の染付碗である。口径11.0cm、器高4.5cmで口縁 $\frac{1}{2}$ 及び高台 $\frac{1}{2}$ を欠いている。素地は白色で、地の軸は乳灰白色を呈する。文様は外面の高台部に三重線を配し、体部には松葉の文様、内面の口縁には「」の文様が描かれている。見込の文様は梅花文である。文様の色はすべて、くすんだコバルトブルーである。

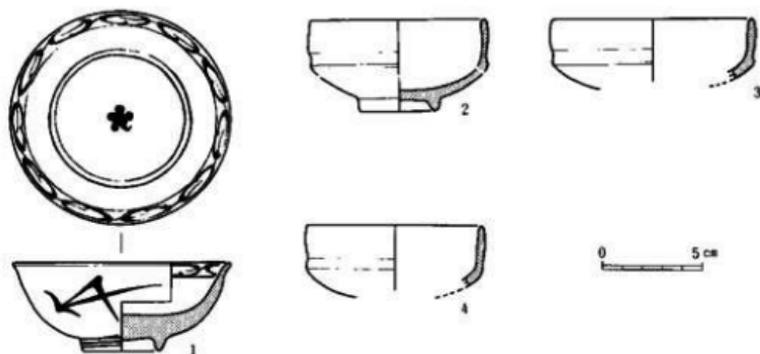
2はNa3 トレンチ出土。口縁 $\frac{1}{2}$ を欠いている。素地は灰白色で、淡黄緑色の軸が体部下半までかかっている。なお、口縁と体部下半は直接々合しないが、軸の発色状態、法量からみて同一個体と思われる。

3はNa3 トレンチ出土。口縁 $\frac{1}{2}$ のみ残存。2と同一器形と思われる。法量はやや大きい。素地は灰白色で、軸は2と同様である。

4はNa2 トレンチ出土。口縁 $\frac{1}{2}$ のみ残存。2、3と同一器形と思われるが、体部の稜が他に比してなだらかなカーブとなっている。素地は灰白色で、軸は淡黄緑色のものがかかっている。

IV 小 結

県内牧の沿革：今回発掘調査した元山所在馬土手は、小金牧の内牧である中野牧の一部である。千葉県内には古くから牧場が多くあり、律令時代からその存在が知られている。「延喜式」には下総国に五ヶ所の御牧（高津馬牧、大結馬牧、本嶋馬牧、長洲馬牧、浮嶋牛牧）があり、上総国に大野馬牧、負野牛牧、安房国には白浜馬牧、鈴師馬牧があったと記されている。さら



第5図 出土遺物 (1/4)

に、武家の時代になると軍馬を大量に必要とするようになり牧場の存在が、より重要性を帯びてきた。江戸時代になって、徳川幕府は慶長十九年(1614年)に、従来の牧場を整理して下総に小金三牧(上野牧、中野牧、下野牧)と佐倉七牧(矢作牧、取香牧、内野牧、高野牧、柳沢牧、油田牧、小間子牧)を設置した。その後、八代將軍吉宗の時、享保七年(1722年)に再整理され、小金三牧は従来の三牧の他に、上野牧から分割した高田台牧と印西牧の計五牧とした。(第6図)また小金牧と佐倉牧を統轄するために、旗本小宮山奎進により金ヶ作に役所を設け、従来からある野馬奉行(綿貫氏)が技術的実務方面を担当し、行政的分野を金ヶ作役所の所轄とした。この時に、とくに重要な中野牧を金ヶ作役所の直轄支配とした。

馬土手：各牧には、馬を放牧する放牧場を囲うように土手を築き、牧馬の逃亡を防いだり、野犬などの外部からの危害から馬を守るようにした。これが、馬土手(野馬堀とも言う)で、各地に村落や宿場が点在するので適当地域を区切って牧とし、牧と村落、牧と農作地を馬土手で区切ったものである。また、この土手には「古土手」と「新土手」があり、新土手は小金牧内の新田開発に伴い、享保八年(1723年)に代官小宮山奎進により新田を馬から守るために築かれたもので、古土手の高さが3m前後あるのに対して、新土手の規模は小さい。元山所在馬土手及び周辺の残存馬土手(第2図)は調査結果からみて古土手に属すると思われる。次にこの土手にも様々な形態があり、その種類は以下の通りである。

一重土手……側溝(野馬堀)のあるもの。

……側溝のないもの。

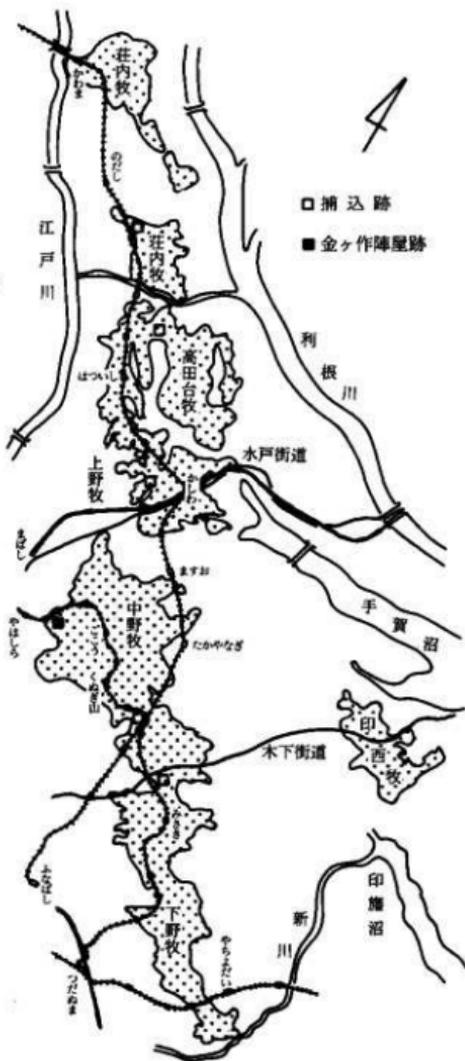
二重土手……地表面に穴を掘り左右に掘った土を盛ったもので、断面がM字形を呈する。

これらの土手は設置場所によって違いがあり、一重土手で側溝のあるものは地境に多く、一重土手で側溝のないものは牧場の区切り土手で、二重土手は「お囲い場」などにみられるもの

である。元山所在馬土手は調査区域に限界があり側溝の有無については確証が得られていない。また、この付近は後述するように「五助木戸」（本遺跡北東約150mの善光寺交差点）と呼ばれる木戸があった所で、また松戸市教育委員会の教示により、本馬土手は木戸に伴う土手ではなく、それよりやや南に走る土手であることが判明した。（第2図及び付図参照）調査結果（P4・8参照）と位置的なもの、字名（本土手の両側とも松戸市五香六実字元山である）などを考え合せると地境に作られた土手よりも牧の区切り土手の可能性があるのでないかと思われる。

木戸：江戸時代には馬は相当高価なもので、徳川幕府にとっても重要なものであった。従って馬の管理は非常に厳しく、牧と村落との出入口には木戸を作り、馬の逃亡の防止、通行人の人員別改めを行った。松戸市内には13ヶ所の木戸が現在知られているが、はっきりとしない。

栗ヶ沢木戸前、千駄堀木戸、金ヶ作新木戸（五助木戸）、高柳新田元木戸、松戸新田野間木戸、日暮木戸場、河原塚木戸場、和名ヶ谷西木戸、大橋木戸前、紙敷木戸場、申崎新田木戸前、高塚新田突棚、同木戸前などがある。本馬土手付近には五助木戸（金ヶ作新木戸）があり、この木戸には常時木戸番がいたと言われている。また徳川幕府は中野牧において（現在の松飛台付近）、



第6図 小金牧各内牧の分布図

(松戸市史中巻・第43回享保七年実測の小金牧各内牧の略図より引用)



第7図 松戸市内残存馬土手分布状況

將軍の鹿狩り（吉宗 2 回，家齊，家慶各 1 回）を行い，その際の入口が五助木戸であった。五助木戸から南へ約 500m の所には，御狩場の「お立場」があった。幕末の慶応 3 年（1867 年）にはフランス皇帝ナポレオン三世より慶喜へアラビア馬 26 疋が贈られ，これらの馬を五助木戸脇の囲い場の厩舎に収容した。

込跡：各牧には放牧馬を捕え，選別し，烙印を押したりする込跡が設けられていた。中野牧にも，現在の鎌ヶ谷市初富 377-20 他に県指定史跡の「小金中野牧の込跡」が残っている。（第 6 図，付図参照）

以上，中野牧を中心として牧を概観してきたが，現在，これらの遺跡（とくに馬土手）はその大半が消滅している。（第 7 図参照）我々が社会生活を営む上で，開発行為は避けられないものであり，従って広く分布する野馬除土手をすべて保存しておくのは不可能と思われるが，江戸時代の徳川幕府による牧の経営を知る上で貴重な資料であることも事実である。従って，現段階の早い時期に馬土手と牧に所属する諸施設を記録保存しておくことが痛感される。

最後に，小結をまとめるにあたって，松下邦夫著「松戸の歴史案内」をかなり参考にさせていただいたことを付記しておく。

参考文献

「松戸の歴史案内」松下邦夫著（郷土史出版）1982. 7. 1

「松戸市史」中巻

「柏のむかし」柏市史編纂室

「千葉県文化財」千葉県教育委員会

「千葉県天然記念物実態調査報告書Ⅰ」千葉県教育委員会

「松戸の遺跡」松戸市教育委員会 1976

HORSE-EMBANKMENT AT MOTOYAMA

CONTENTS

Introduction

Introductory remarks

1. Details of Investigation
2. Environmental Setting
3. Features and Artifacts
 1. Features
 2. Artifacts
4. Conclusions

Figures

1. Topographical Map
2. Distributional Map of Horse-embankments at Motoyama and the surrounding area
3. Plan of Horse-embankment at Motoyama
4. Cross-section of Horse-embankment at Motoyama
5. Artifacts
6. Distributional Map of Pastures belonging to the Kogane Pasture
7. Distributional Map of Horse-embankments in Matudo City

Appendix

Distributional Map of Horse-embankments concerning with the Nakano Pasture in the 19th century of the Meiji era

Plates

1. Air View of the Site and the Surroundings
2. 1. Before Excavation
 2. Profile of Trench No. 1
3. 1. Profile of Trench No. 2
 2. Profile of Trench No. 3
 3. Distant View of Defensive Bank for wild horses remaining to the north-east of the site (Fig. 2-1)
4. 1. Near View of Plate 3-3
 2. Near View of Horse-embankment remaining in the precincts of the Zenko Temple

(Fig. 2-2)

3. *ibid.*(Fig. 2-3)

This is an archaeological report of the horse-embankment at Motoyama, which is located at Motoyama 10-1, 10-10, 10-27, Goko-mutumi, Matudo City, Chiba Prefecture.

The site is on the terrace (28 m above sea level) to the south-west from the main area of Matudo City. Matudo City is in the north-west of Chiba Prefecture.

The main feature of our investigation was what we call "Umadote", which was a bank to enclose horses of the pasture.

Before investigation, the embankment was thought to be 30m in length, 2m in height and 4m in width and to extend in the direction of ENE-WSW (Fig. 3, Pl. 2). After investigation, it is certified that the embankment was originally bigger than it is. It was 30m in length, 3m in height and 6.5 m in width. On the embankment there was a flat area (2 m wide) and it was originally pentagonal in crosssection (Fig. 4). To the north side of the embankment there was no ditch relating to the bank. To the south side of the bank it was not made clear because the area was beyond the limits of our investigation. From the bank 20 pieces of china of the Edo era were found (Fig. 5)

The foregoing is the summary of our investigation. In the following I would like to mention the historical meaning of the site.

From the ancient times Chiba Prefecture was famous for the pastures. In the middle age the pastures were important, because the horses were needed for wars. In the Edo era, the Tokugawa Shogunate made three pastures in Kogane and five ones in Sakura. In the 7th year of the Kyoho Period (1722), two pastures were added to Kogane. From the north they were named Takadadai, Inzai, Ueno, Nakano and Shimono. The site we excavated is a part of embankments belonging to the Nakano pasture, one of the five pastures in Kogane. The Nakano pasture was considered as an important one for the Tokugawa Shogunate.

写 真 图 版



遺跡周辺の航空写真 (S.57, 日経コンサルタント撮影)



1. 調査前全景



2. No.1 トレンチ土層断面



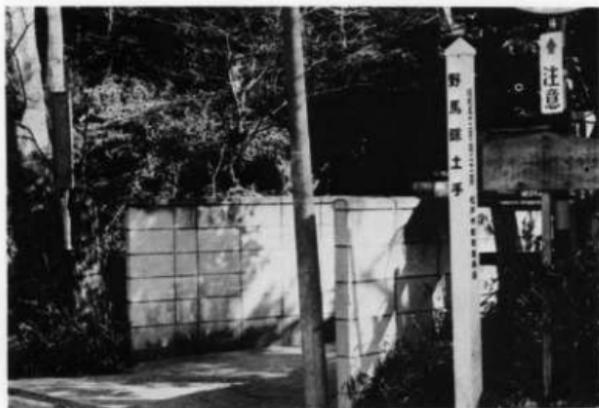
1. No.2 トレンチ土層
断面



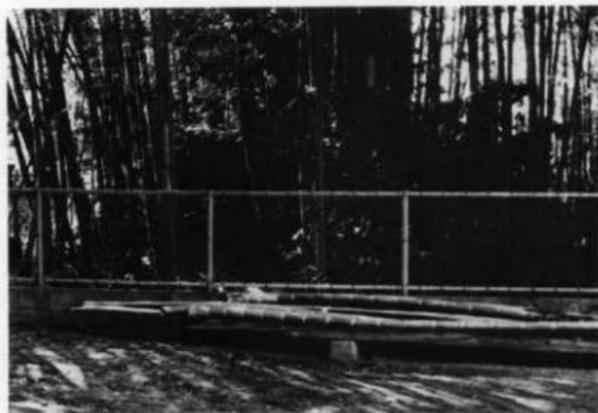
2. No.3 トレンチ土層
断面



3. 遺跡北東に残る馬
土手遠景
(第2図-①)



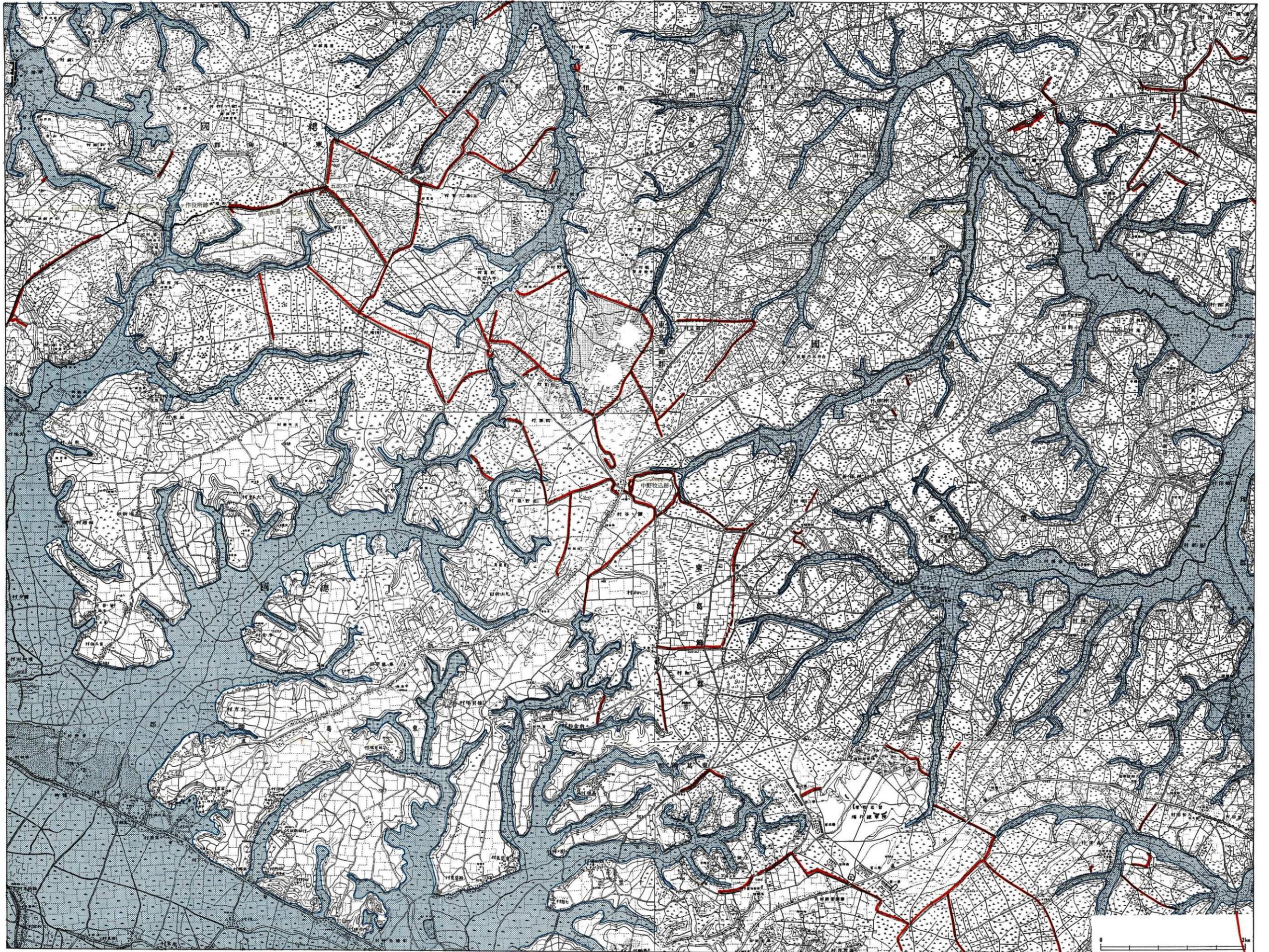
1. 図版 3-3 の近景
(第 2 図-①)



2. 遺跡東側善光寺境内に残る馬土手近景
(第 2 図-②)



3. 同上
(第 2 図-③)



第65集 付図 明治10年代の中野牧を中心とする馬土手分布図 (1/20000)

松戸市五香六美元山所左馬土手

松戸市五香六実元山所在馬土手

印刷 昭和58年3月28日

発行 昭和58年3月31日

発行 千葉県東葛飾土木事務所

松戸市竹ヶ花24

編集 財団法人 千葉県文化財センター

千葉市亥鼻1-3-13 (0472)25-6478

印刷 株式会社 弘文社

市川市市川南2-7-2 (0473)24-5977
